

思います。しかし、抜本的な対策を講じて、何としてもこの難局を乗り越えなければなりません。

一介の教育相談員が、前髪を色鮮やかな紫に染めた消費者庁長官のような提言を申し上げますのは、「社会の縮図」である学校にとって、大人が誠実に生きる社会こそ、最も望ましい教育環境であり、バック・ボーンであるからです。

この点につきましては、ぜひとも、「立科教育」の原点となるべき五無齋・保科百助先生の「学校教育は、教育の一部分であって、教育の全体ではない。ところが、世人は、教育の全体をすべて学校に委ね、その責任の全部を学校に負わせようとする傾向がある。これは世人の過信であり、学校教育に重荷を負わせるものである。教育は、社会全体の担任であり、世人は、ことごとくある意味の教育者でなければならぬ。」という教えに、しっかりと耳を傾けていただきたいと存じます。

食材虚偽表示の報道に接して、あらためて本物を見抜くことの難しさを痛感しました。食通の方の自信喪失が案じられるほど、実際に舌鼓を打った客が、その食材の味覚や食感などで偽装を指摘した事例が、ほとんどないからです。

なぜ、本物と偽物の区別がつかないの

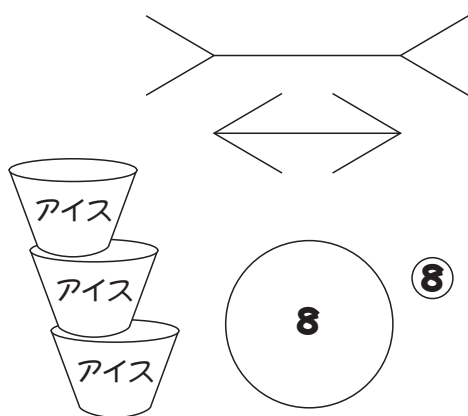
でしょうか。

第一に、当然ですが、本物そのものを知らないことが挙げられます。本物を知らなければ、比較の仕様がありません。

しかしながら、感覚や記憶は非常に微妙です。本物を知っていた（高級食材の芝エビを食べたことがある）からといって、本物（芝エビ）と偽物（養殖バナメイエビ）の区別がつくとは限りません。

このようなあやふやな心理状態に、ブランドや老舗などの錯覚情報が作用しますと、簡単に偽物を本物と思い込んでしまいます。人は錯覚の生物なのです。

ちなみに、次の図を、見比べていただきたいと存じます。同じ長さや大きさでも、周囲の錯覚情報によって、錯視が生ずるのではないのでしょうか。



引用 II 「錯覚の心理学」

椎名健著・講談社

残念ながら老生も、本物と偽物を的確に見分ける自信がありません。本物には、必ず本物だけが持つ「何か」があるはずですが、その「何か」を感じ取ることがなかなかできないのです。

ある中学校で催された「高嶋ちさ子バイオリンコンサート」では、数億円のストラディバリウスと数万円のバイオリンの音色を聴き分けられず、数万円のバイオリンのほうが美しく、洗練された名器の音色と判断してしまいました。

昨年9月、有線放送でも申し上げましたが、保科百助先生の本名と号（雅号・ペンネーム）につきましても、確たる自信がありません。

学校教育の場をはじめ、一般的に定着しているのは、本名が「ひやくすけ」、号が「五無齋」です。

一方、先生の本名は「ももすけ」で、「ひやくすけ」は、「五無齋」や「蜻洲」などと同じく、先生の号の一つである、という説があるのです。

その根拠は、次の通りです。

○「長野県歴史人物大事典」（郷土出版社）に、「本名はももすけ」と明記されている。執筆担当の中村一雄は、「長野

県教育史全18巻」を編集し、「信州近代の教師群像」などを著した方で、長野師範学校の卒業生名簿などで確認し

たこのこと。さらに、「郷土歴史人物事典長野」（古川貞雄編著・第一法規）にも、「本名ももすけ」と明記されている。

○蓼科実業補習学校（現蓼科高校）の卒業生が「ほしなももすけ先生」と呼び、先生の姪も、往時、「ももさん」と呼んでいたとのこと。

○「百」は、当時、人名で使うときは「もも」が通例であった。

先生の本名につきましても、芝エビを知らず、名器・ストラディバリウスの音色を聴き分けられなかった愚鈍の身が、またぞろ迷い、悩んでおります。

親御さんも、先生方も、数値化された評価や比較、先入観、過度の期待などの錯覚情報によって、ありのままの児童・生徒を見失ってしまったという経験があるろうかと存じます。

今、子どもとの良き人間関係を築くために、身の回りに氾濫している様々な錯覚情報に惑わされず、子どものありのままを感じ取る心を磨くと同時に、状況によっては、本物を見誤ってしまう親であり、教師である、という謙虚な自覚が求められているのではないのでしょうか。

相次ぐ「あってはならないこと」に流されない年にしたいものです。